



一八九九年、北京で清朝の大官、王懿榮の家に寄食していた学者、劉鶚（鉄雲）は、「龍骨」と称し、漢方薬としてもちこまれたものに彫りつけてある古代文字が殷代の文字であることを発見し、一九〇三年には、はやくも『鉄雲蔵龜』という書物を刊行して、世間に甲骨文の存在を知らせたのが、その後の甲骨文研究の発端となった。また、この甲骨片を出土する河南省安陽の小屯村が「殷墟」（殷の都あと）にちがいないと考えられるに至った。

甲骨文研究は、その後、いち早く、羅振玉、王国維によって研究がおこなわれ、解説が進められ、その史的性格が解明されはじめた。甲骨文研究は、その後、著しく進展し、ことに、一九二八年から三七年まで、中央研究院によって、甲骨片の出土地である河南省安陽県小屯村での発掘がおこなわれ、考古学上の知見が加わることにより、殷代後期の史実の解明は急速に進んだ。

殷墟出土のいわゆる甲骨文字は二〇〇〇字を超える文字数が揃っており、複雑な文が綴られている。これが現在の漢字の祖型である。その後、この文字は書体を多様に変化させながら、今日も東アジア地域において使用され、文化的アイデンティティの最たるものとなっているのである。

甲骨文の発見とその後の考古学的発掘作業は「甲骨学」と殷商考古学という学問の領域を形成することとなり、中国文化の骨格をつくりあげたものが殷に続く周の文化であるとすれば、それに先立つ殷の文化ということによって世界的な関心を喚起しつつ、すでに一世紀にわたる研究史をもっている。

殷から西周にかけては、王やその周辺の一部の支配層が文字を占有していたが、西周中期以降は各諸侯国内で青銅祭器が鑄造されるのが一般化し、銘文が記されるようになった。文字の使用は拡大して、地方化が進んでいたのである。のちに秦の始皇帝が天下を統一したときには、その施策として各国の文字の統一を図らなければならなかったほどに多様化していた。

本論文「漢字形成史研究—先秦時代の漢字体系における「説文籀文」の位置付け—」の執筆者は、大学院の授業のなかで、段玉裁の『説文解字注』を読むことを通じて、中国の古代文献の知識をつけ、その後、松丸道雄教授主催の「西周金文を読む会」に参加する機会をえて、次第に中国の古代文字に関心を持つようになった。この会への参加によって、問題関心の対象は「秦系文字」となった。このことを解明するために、王国維の唱える学説「戦国時秦用籀文六国用古文説」（『観堂集林』巻第七所収、一九二三年発表。実は、王国維は一九一六年にすでにこの論文を公表している）に導かれて、「説文籀文」の実態解明に向かったのである。

論文執筆者は、膨大な資料を渉猟し、実証的な研究を積み重ねつつ、最終的には、王国維とは異なる独自の結論を導き出すことに成功している

要旨

本論文は、先秦時代の漢字体系における地域性と時代性を、出土文字資料を用いることによって明らかにすることを目的としている。

秦は、西周末期に、現在の甘肅省東南部の地に勃興し、周の東遷後、西周の故地に移り、周の遺民を収めると同時に、周族の遺していった文字文化も吸収した。ほぼ五〇〇年後、秦の始皇帝が天下統一を果たす。時を同じくして実施された文字統一（すなわち「秦系文字」正統化）という画期的な出来事が、漢字形成史の上で大きな結節点をなしたのであった。

しかしながら、その文字統一時の文字の実態、統一にいたる過程を推察する資料、とくに「秦系文字」に関する同時代資料は豊富とは言えず、問題の大きさに比べて、解明を困難にする要素がこれまで多くあった。

しかるに、ごく近年、これらの問題に直接かかわる、きわめて重要な新出資料が、大量に発見されて、発表されるにいたった。

論文執筆者は、これらの新資料について史料的検討を加えた上で、先秦時代の漢字の形成過程を解明することを目指したのである。

序論では、秦系文字成立前史として、甲骨文字から西周金文までの文字の実態について、とくに、新出の文字資料である**猷殷**（一九七六年出土）、と**趨鼎**（一九六〇年出土）を中心に検証した。

漢字の使用は、甲骨文字に代表される殷の文字からはじまり、武王克殷後、西周王朝へと継承され、西周前期から中後期における青銅器文化のなかで洗練され発達していったものである。これを実証するのが、多数存在する殷虚出土の甲骨片と、西周時代の有銘青銅器である。

『説文解字』叙及び『漢書』藝文志によれば、西周時代の宣王期に『史籀篇』という字書が編纂されたという。これは、西周後期において、周王室による文字統一が果たされたことを意味するのであるが、このことを実証する銘文を帯びている上記二つの青銅器である。

序章につづく第一章では、西周末から始皇帝の文字統一にいたるまで、新出資料を中心とした秦系文字資料について史料的検討を加え、秦系文字と「説文籀文」について王国維の学説を再検証する基礎的研究を行っている。

王国維の「戦国時秦用籀文六国用古文説」（一九二三年）は、従来の古文字研究に対して文字の地域的特徴、使用時期という視点からはじめて接近を試みたものであって、古文字研究史上、画期的な論文である。王国維は、戦国時代における文字の地域性という視点から、「説文籀文」は、秦で使用された字形であり、「説文古文」は六国で使用された字形であると唱えた。この学説は、その後の新資料の発見によって修正されるべきところはあるが、漢字研究に地域性と時代性とに基づいた接近方法をもたらしたという意味で、方法論から評価されるものである。

王国維の研究から八〇年近く経過した現在、この問題に直接かかわる重要な資料がつつぎと発見されている。主要なものとしては、一九七八年に陝西省宝鸡県楊家溝太公廟村

から出土した武公秦 鐘、一九八六年に陝西省鳳翔県南指揮村で発見された秦の墓葬群の一つである秦公一号大墓より出土した有銘石磬などの春秋時代の長銘の文字資料や、一九九五年以降、陝西省西安市北郊において大量に私掘され骨董市場に流出した秦封泥のような、始皇帝天下統一前後の文字資料がある。執筆者は、これらの新出文字資料を中心に、秦系文字を網羅して、史料として年代的検討を行っている。このことによって、王国維の学説を再検証するための基礎とした。

第二章では、上述の史料的検討を加えた結果にもとづき、甲骨文、西周金文、春秋戦国時代の秦系文字以外の文字史料なども加えて、従来からその関係が指摘されながら、王国維以来、網羅的検討がおこなわれていなかった「説文籀文」の地域性、時代性について、「説文籀文」二八二字すべてについて逐次的に検討を加え、これらが現存する甲骨文、金文、石刻などの殷、周、春秋戦国時代の古文字資料といかなる関連をもつかを質的、量的に解明することを意図している。このことによって、「説文籀文」と、先行する出土文字資料との字形的連続性を検証し、「説文籀文」の源とされる『史籀篇籀文』の地域性、時代性を明らかにする基礎的作業をおこなっている。これは、つまり、王国維がかつて「戦国時代に秦の地域において使用されていた文字体系」に由来するものなのかどうかを再検証するためである。

この作業の結果では、それぞれの文字は、つぎの《甲類》《乙類》《丙類》の三類に分類することができた。

《甲類》一〇八字：古文字資料中に「説文籀文」体との間に字形的連続性が発見することのできた文字群。

《乙類》五七字：「説文籀文」が記されている条で、「説文籀文」体は小文字資料とは合致しないが、「説文小篆」、「説文古文」などの別体字が古文字資料中に発見することのできる文字群。

《丙類》一一七字：「説文籀文」のみならず、『説文』所収のすべての字形が古文字資料の中に発見できないもの。

第三章では、第二章での検討結果を集約して、「説文籀文」の地理的分布と、出現時期という観点から、「説文籀文」の地域性と時代性の分析をおこなっている。

春秋戦国時代、「説文籀文」は、秦のみならず、楚、齊、晋など二六の国の文字資料に「説文籀文」と字形的連続性をもつ文字が出現していた。西周宣王期に『史籀篇』として集大成されたのは王室の正統書体であり、『史籀篇』所収の個々の文字を『史籀篇籀文』と称すれば、周の東遷後、これが秦のみならず、全国的規模で伝播したということを検討結果の数値は示している。

時代性という観点から検討結果をみれば、「説文籀文」が最も高い存在比で出現したのは西周時代であった。

西周青銅器銘文と字形が一致した「説文籀文」は六五字を数え、《甲類》の中での存在比は六〇・二%と、殷代文字、春秋戦国時代の文字と比較すると、ぬきんでた高い数値を示していた。

このことは、西周 王・宣王期に実在した史籀という人物による書体統一によって正

統化された『史籀篇籀文』体が「説文籀文」の祖形であることの証左である。

本論文は、最後に、つぎのように結論している。

王国維の学説は、地域性と時代性についてつぎのように修正されるべきである。地域性については、以下のものである。西周の故地に居住した秦国によって、それは直接的に吸収されたが、春秋戦国時代、必ずしも秦の地域のみ限定されることなく、楚、齊、晋などの地域で「説文籀文」が用いられていて、『史籀篇籀文』は広範に伝搬していたと考えられる。

時代性については、西周後期に文字統一された王室宮廷体の集大成である『史籀篇籀文』がその背景にあることから、戦国時代の秦に限定されることなく、西周金文まで時代を遡らせるべきである。

評価

この度の審査に当たったのは、東アジア諸言語を対象とした言語学を専門とする中嶋幹起（審査委員・主査）、甲骨文研究による殷代史、ことにその国家構造、金文・青銅器研究による西周時代史の解明に従事する松丸道雄氏（東京大学名誉教授）、中国古典学とくに『論語』の文献学的研究を専門とする高橋均氏（大妻女子大学教授）、朝鮮の近・現代文学を専門とする三枝寿勝教授（東京外国語大学教授）、徽州商人の研究・中国宗族研究・李鴻章の政治と外交の研究を進める臼井佐知子教授（東京外国語大学教授）の五名である。

審査委員の評価は以下のものであった。

論文執筆者は膨大な文献資料をよくこなしつつ、実証的研究をおこなっている。また新出資料情報を渉猟し、北京大学中文系への留学（中国政府奨学金留学生）を通じての研究の蓄積も生かすことができた。王国維の学説に導かれた研究の出発ではあったが、結果的には、王国維の学説とまっこうから切り結ぶこととなった。そして、論文執筆者は、最終的には王国維とは異なる独自の結論を導き出すことに成功しているのである。

漢字を対象としたの研究をおこなう場合、清朝考証学の伝統においては、後漢の許慎の『説文解字』が正しくその筆頭に挙げるべきものである。執筆者はこの『説文解字』をもとにして、具体的にそこに記載されている「説文籀文」へと踏み込んで分析を加え、推定の限りでしか知り得ない『史籀篇籀文』の実態をおぼろげに見せてくれていると言える。執筆者の目指す『史籀篇』が編纂された西周後期における王室の正統書体『史籀篇籀文』の姿に些かなりとも近づいてみたい」とする意欲は十分に評価に値するものであり、その方法論もふくめて合格点に達している。今後は戦国文字に対する丹念な調査を期待したい。